ハンス・メディック「グローバル的転回？ 拡張するマイクロヒストリー」

Hans Medick, “Turning Global? Microhistory in Extension”, *Historische Anthropologie*, 24-2, 2016, pp. 241-252.

紹介

同論文は、グローバル・マイクロヒストリーの方法論に関する近年の研究状況のレビューである。特に中国における（あるいは中国に関する）グローバルヒストリーやマイクロヒストリーの現状が紹介されている点が有益。

○導入部¹

- ・近年のマイクロヒストリー「ルネサンス」におけるもっとも挑戦的な展開がグローバル・マイクロヒストリーである。すでに2011年には、フランチェスカ・トリヴェッタートが「グローバル的転回に直面したマイクロヒストリーに未来はあるのか」と問いかけている²。今のところ、この展開の帰結はまだ明確ではない。しかし、現在進行中のアプローチのいくつかの道筋についてスケッチしてみることは有益であろう。

○中国での経験

- ・著者はまず、中国で得た個人的な経験から話し始める。数年前にはマイクロヒストリーのアプローチを結びつけることができなかつたような場所でも議論が始まっている。
- ・著者は2015年5月に北京で講演を行なった。中国社会科学院(Chinese Academy of Social Sciences)の「世界史研究所」(Institute of World History)に招待され、ドイツの農村におけるプロト工業化について話すことになった。
- ・著者が事前に中国の同僚に提案したいくつかの講演タイトルの中には、三十年戦争のマイクロ・マクロヒストリー的側面に関する講演もあったが、「世界史研究所」の同僚は、ドイツのライヒンゲンの農村に関する著者のマイクロヒストリー的研究の成果を聞くことを選んだ。その講演は「ドイツのある農村における織物、生存、プロト工業、1700年から1900年、方法と研究実験としてのマイクロ・ヒストリー」と題された³。
- ・著者は研究の結果だけでなく方法論的アプローチについても説明した。これは、「伝記的な記録の拡張的連結」(extended linkage of biographical records)という方法である。この

¹ 小見出しのタイトルはレビュー担当者が付した。

² Francesca Trivellato, “Is there a Future for Italian Microhistory in the Age of Global History?”, *California Italian Studies*, 2, 2011, p. 1.

³ “Weaving, Surviving and Proto-Industry in a German Village, 1700 to 1900. Micro-history as Method and as Research Experience”

方法は、伝記的、量的、質的なアプローチを統合することによって、農村の豊富な史料に記録されたすべての人と家族の日常生活や仕事を二世紀半にわたって調査することを目指す。著者は、記録を連結させることで、名前つき史料の「意図せぬ証拠」(unintended evidence)を利用する方法が、より広範な問いに答えるための鍵となることを提示した。

- ・ 著者の講演には中国の同僚たちから活発な応答があった。著者がもっとも驚いたのは「世界史研究所」の所長である張順洪(Shunhong Zhang)が著者宛てのメールの中で述べた言葉だった。「私は、世界史がマイクロ・ヒストリー(micro-histories)の中に存在し、農村で起こったことがグローバルな意味を持つのではないかと考えています」。
- ・ この言葉は、古い中国史のパラダイムである「世界史」(World History)という概念を立て直そうとしている「世界史研究所」の所長の言葉としては注目すべきものだった。この(古い)世界史概念は、現在中国では議論の俎上に載せられており、グローバルヒストリーとしての世界史という新しい概念に変わりつつあるように見える。
- ・ しかし、こうした展開においてもマイクロヒストリー的アプローチの役割については、まだ議論されていないようだ。張順洪の発言が重要なのはこの点においてである。中国におけるグローバルヒストリーとしての世界史への転回にマイクロ・ヒストリーが持ち出されるとすれば、それは田園地帯、とくに農村のマイクロ・ヒストリーである。

○中国における、あるいは中国に関するマイクロヒストリー

- ・ 興味深いことに、これまで中国で出版された中国史を題材にした歴史書で、タイトルに「マイクロ・ヒストリー」とあるものは、中国系アメリカ人の歴史家、李怀印の『社会主義と改革下の農村の中国 — マイクロ・ヒストリー、1948-2008年』⁴だけである。
- ・ 李は、中国革命後の数十年間に行われた農業集団化の期間に江蘇省 Dantai 村にあった膨大な文書史料を使用した。李は、この村に生まれた者としての知識に加えて、オーラル・ヒストリーのフィールドワークを用いて、「自分の」村についての型破りなマイクロ・ヒストリーを生み出した。革命期の全権を有する社会主義国家という前提に対して、彼は村人とそのネットワークの行為主体性を強調している。
- ・ ジョナサン・スペンスは、近世中国に関する超文化的なマイクロヒストリー的アプローチの先駆者と考えることができる。彼の著作『胡の問い』⁵は、40歳の中国人門番でカトリックに改宗した男の物語である。この男は1722年にイエズス会の宣教師に仕えて広東からパリに移住し、新しい文化的環境の中でコミュニケーションを取ろうとしたが、

⁴ Huaiyin Li, *Village China under socialism and reform: a micro history, 1948-2008*, Stanford and Beijing, 2009.

⁵ Jonathan D. Spence, *The Question of Hu*, New York, 1988.

それに挫折してしまった。こうして、彼はシャラントンの施療院に精神異常者として収容されたが、その後、中国に帰国することができた。多様な史料を同じ人物に結びつけるスペインの物語的文学的アプローチは、マイクロヒストリー研究に接近している。

- ・スペインの視点とは対照的に、アン・ジェリッツェンの研究は、一人の人間に焦点を当てる方法からは離れている。彼女の研究は、ローカルとグローバルをつなぐ二つの異なる形態を指摘した⁶。特に、磁器製造の街である景德鎮と中国外の広い世界との交易・交換のネットワークに関する彼女の研究は、希少品の生産と交換を通じて確立された相互接続を追いかけることで、グローバル化する世界の中にローカルな歴史を位置づけ追跡している。
- ・他にも、広州の中山大学とその「歴史人類学センター」(Centre for Historical Anthropology)を中心とするグループのように、中国の地域史研究(regional historiographic)のグループからも革新的な研究が行われている。このグループの方法論的アプローチは、代表者の一人であるヘレン・シウによって、ローカル、リージョナル、トランスローカルを扱いつつも、マルチスケールのグローバルな視野を完全に排除するわけではないという複合的な(complex)マイクロヒストリーの視点に近いと特徴づけられている。
- ・ヘレン・シウが、エリック・タリアコッツォ、ピーター・パデューと共同で編集した『裏返しのアジア』と題された一連の出版物は、これまでに二巻出版されており、シウが描いた方法論の道筋を辿ろうとしている⁷。この研究は、詳細に調査されたローカルまたはリージョナルな事例、例外的に豊かな(exceptionally rich)文書史料、あるいは典型的な(exemplary)歴史的出来事やプロセスからできている。個々のケーススタディのほとんどすべてが興味深いものではあるが、『裏返しのアジア』という視点には限界がある。アン・ジェリッツェンが書評で述べているように、グローバルな歴史的接続への参照は、アジア中心の視点に限定されてしまっているのである。
- ・中国とアジアについて、マイクロとグローバルの歴史を接続する分野で、現在もっとも興味深い研究の一つが、イタリア系アメリカ人の歴史家エウジェニオ・メネゴンのものである。メネゴンは彼の最初の研究において、17世紀にヨーロッパの宣教師が帝国中国に持ち込んだカトリックのキリスト教が、ローカルなレベルでどのように領有され(appropriations)、修正されたかを調査した⁸。メネゴンはここで、文化・宗教の移転を輸

⁶ Anne Gerritsen, “Scales of a Local. The Place of Locality in a Globalizing World”, in Douglas Northrop (ed.), *A Companion to World History*, London, 2012, pp. 213–226.

⁷ Eric Tagliacozzo, Helen F. Siu, Peter C. Perdue (eds.), *Asia Inside Out: Connected Places*, Cambridge, MA, 2015; idem, *Asia Inside Out. Changing Times*, Cambridge, MA, 2015.

⁸ Eugenio Menegon, *Ancestors, Virgins, and Friars. Christianity as a Local Religion in Late Imperial*

入か輸出かという単純な観点から見ることに反対している。彼は近世・近代から今日に至るまで、中国で新しいキリスト教の様式を発展させてきたローカルな宗教的信仰の自律性を強調する。

- ・この最初の研究に続いて、彼は現在「清朝の北京における日常生活と権力のネットワーク——17・18世紀の帝国宮廷におけるヨーロッパ人」⁹という新しい研究プロジェクトを進めている。メネゴンはここで、ヨーロッパ人の小集団の役割を調べている。こうしたヨーロッパ人のほとんどはカトリック聖職者であり、北京の宮廷の周辺で、技術や科学の専門家として活躍していた。しかし、彼らは同時に、中国のカトリック共同体のネットワークを非公式に支援する秘密の宣教師としても活動していた。メネゴンは、この新しいプロジェクトによって、北京の宮廷の歴史を脱中心化すると同時に、科学的・技術的知識、主に嗜好品分野での商品取引、カトリック教会の継続的な宣教活動などの新たなグローバル・インフラが、中国の宮廷社会の内外で、個人や社会集団の日常生活にどのような影響を与えたかを明らかにしようとしている。もはや皇帝とその閉鎖的な宮廷は関心の中心になっていない。それらはより広範な関係性、行為主体性、依存性の網の目の一部を形成しているのである。
- ・メネゴンは近世における中国とヨーロッパの相互作用に、非ヨーロッパ人の視点から焦点を当てているが、これは明確に「多角的な視座」(multi-scopic perspective)に基づいている。メネゴンは彼が「近年再開されたマイクロヒストリーの歴史家とグローバルヒストリーの間対話」と呼ぶものに自分も参加していると考えている。

○マイクロヒストリーの歴史家とグローバルヒストリーの間対話

- ・この方向性でもっとも興味深い一歩を踏み出したのは、最近ではアメリカの歴史家リン・ハントである。ハントは2014年に『グローバル時代の歴史学』という小さくて読みやすい本を出版した¹⁰。彼女はグローバルヒストリーにおける「トップ・ダウン」型アプローチの欠点が、「世界中の多数の異なる社会を結びつける大きなスケールのプロセス」に焦点を当てて、世界規模の経済プロセスを優先している点にあると考えている。その代わりに、彼女は「ボトムアップの視座」を提案した。
- ・ハントの「ボトムアップの視座」の最先端はその分析モデルにある。ハントの分析モデルは、「文化横断的な取引」や「ローカルな文化的パターン」(たとえば「嗜好や感性の変化」)とそれらを媒介するものを重視している。ハントは、このような文化的・社会的要因を、グローバルな経済的要因が優位になる以前の原動力として、歴史的に有効な

China, Cambridge, MA, 2009.

⁹ “Daily Life and Networks of Power in Qing Beijing: Europeans at the Imperial Court in the Seventeenth and Eighteenth Centuries”.

¹⁰ Lynn Hunt, *Writing History in the Global Era*, New York and London, 2014 [長谷川貴彦訳『グローバル時代の歴史学』岩波書店、2016年] .

「原因」(causes)として指摘している¹¹。

- ・リン・ハントの立場は、概念的には、「グローバルな社会的場のマイクロヒストリー」(microhistory of global social sites)に焦点を当てる立場といくつかの類似点がある。この概念は、ダグマー・フライストが、テオドール・シャッツキ(Theodore Schatzki)の実践理論を独創的に応用して創り出したもので、グローバル・マイクロヒストリーの方法論的な試金石と分析の出発点として提案されたものである¹²。
- ・このアプローチは、17世紀から19世紀初頭までのイギリス海事高等法院(British High Court of Admiralty)のいわゆる「捕獲船文書」(Prize Papers)に関するフライストの研究において、中心的な重要性を持つことが期待されている。これは、英国国立公文書館に保管されている近世の巨大な文書、物品、資料のコレクションであり、英国の私掠船や軍艦による敵船拿捕の産物である。これらの史料は国際的な研究に利用され始めている。
- ・しかし、フライストと彼女の研究チームは、さらにその先を目指している。彼女たちは、捕獲船文書の膨大なコーパス全体を、パブリックな研究史料として、アーカイブを紐解く作業に集中して利用できるように準備している。そのためには、史料を完全な形で体系的にデジタル登録し、ファクシミリによる複製を行い、研究のためのメタデータを結びつけ、最初の内容分析とそれに続く解釈を行う必要がある。グローバルな射程で近世の膨大な量の質的な歴史的証言を集めるこのプロジェクトには二つの課題が存在する。
- ・第一に、この膨大なコレクションと将来の「ビッグデータ」の史料からコンテキストに沿ったマイクロヒストリー研究を生み出すのに適した証拠をどのように選択するのか。第二に、そうした研究の出発点において、発展途上のグローバル・マイクロヒストリーのための新たな問いをどのように設定し、新たな答えを見つけるのか。
- ・グローバル・マイクロヒストリーの方法論的基盤は、もはや白紙状態(タブラ・ラサ)ではない。新世代のマイクロヒストリーの歴史家が、幾人かの旧世代の歴史家とともに、新たな視点をもって、新たな研究分野へと私たちを導いている。
- ・このレビューの最後に、フランチェスカ・トリヴェッタートの研究を取り上げたい。彼女はセファルディム系ユダヤ人の交易ネットワークに関する画期的な研究を行った¹³。

¹¹ [たとえば、タバコやチョコレートの消費は、先住民の影響のもとで嗜好の変化により可能となったのであり、そこからグローバリゼーションが起動し、膨大な経済的变化が生み出された(前掲訳書、70-71頁)]。

¹² Dagmar Freist, "Historische Praxeologie als Mikro-Historie", in Arndt Brendecke (ed.), *Praktiken der Frühen Neuzeit. Akteure – Handlungen – Artefakte*, Köln, Weimar and Wien 2015, pp. 62–77.

¹³ Francesca Trivellato, *The Familiarity of Strangers: The Sephardic Diaspora, Livorno, and Cross-cultural Trade in the Early Modern Period*, New Haven, CT, 2009 [和栗珠里、藤内哲也、飯田巳貴訳『異文化間交易とディアスポラ——近世リヴォルノとセファルディム商人』知泉

彼女はマイクロヒストリー的な立場から、先行研究のカテゴリーやその研究結果に疑問を投げかけている。彼女は、セファルディム系ユダヤ人の二つの家系が幅広い経済的なつながりや取引を推進する契機となったのが、親密な親族関係や宗教的な結びつきだけではなく、不平等な力関係や異質な交易ネットワークが存在する複合的な世界において、複数のつながりや「複数の、流動的で重なり合う文脈」を巧みに利用する「共同体的コスモポリタニズム」(communitarian cosmopolitanism)であったことを発見した¹⁴。

- ・また、トリヴェッラートは、「小さなスケールのグローバルヒストリー」という視点から、1970年代後半に始まったマイクロヒストリーの成果と欠点を繊細かつ批判的に検証している¹⁵。トリヴェッラートの評価においてもっとも注目すべき点は、この10年間に急増したグローバル・マイクロヒストリーの伝記的アプローチの成果を、バランスよく評価していることである。彼女は、「グローバル・マイクロヒストリー」の将来的な展望を描く中で、世界史の舞台の中心に個人や個人の行為主体性をあまりに多く位置づけてしまう「近世に世界中を旅した人の伝記」(biographies of early modern globetrotters)が増えていることに警告を発している。彼女はその代わりに、「彼らのハイブリッド性や活発さを理想化することから離れる」アプローチを奨励している。
- ・社会史と歴史人類学に由来する第一世代のマイクロヒストリーの実践者として、著者は将来のグローバル・マイクロヒストリーは若干の「天邪鬼の精神」(contrarian spirit)を備え、人物、グループ、実践を重視した方法論的アプローチを用いるべきだというトリヴェッラートの希望に賛同する。グローバル・マイクロヒストリーは、伝記的なアプローチとエゴ・ドキュメント¹⁶に焦点を当てることを重要な要素としながらも、「伝記的なジャンルを超えた実験を続けていく」べきである。
- ・グローバル・マイクロヒストリーの研究者に課せられた第一の課題は、おそらく中道な仕方で(in a centrist manner)「グローバルな社会的場」に焦点を当てるのではなく、「間にある空間」(space(s) between)に焦点を当て、歴史的な変化の中でこうした空間において何が起きたのかを考えることである。したがって、ナタリー・ゼーモン・デイヴィスが提案したような脱中心的な超文化的視座から、周縁部や「媒介的な空間」(interstitial spaces)に注目すべきである。
- ・ここで言われているのは、境界や境界の横断、交易ルート、コミュニケーションや知識の伝達ルート、翻訳や交換、またそれだけでなく船のような移動空間、書簡や交易のネ

書館、2019年〕。

¹⁴ Ibid., 18.

¹⁵ Francesca Trivellato, “Is there a Future for Italian Microhistory in the Age of Global History?”, *California Italian Studies*, 2, 2011.

¹⁶ エゴ・ドキュメントについては歴史学文献レビュー⑨を参照。

ットワーク、そして最後に生きていく中で人びとやその社会的世界が交差する現実の
あるいは想像の空間である。こうした文脈において、個人、集団、制度、商品の「複合
的な、文化的、社会的、あるいは経済的關係」を研究し、またグローバル化の多くのプ
ロセスに歴史的に巻き込まれた世界におけるカテゴリーや概念の複合的な関係、移動、
翻訳を研究することが重要である。